

農業水利
偉人伝ワ

後藤鹿太郎

“富士緒井路建設の先駆者”

後藤鹿太郎は古来より水利に恵まれなかった土地で、水路開削に一人果敢に挑んだ。小富士村長甲斐健次郎、後の村長児玉琢磨、工藤吾六の三氏ら同志の力強い協力を得て、水利組合を設立、明治44年1月に水路の開削に着工、幾多の障害を克服し、大正3年6月12日に見事通水に至った。

【後藤鹿太郎の同志】 甲斐健次郎 児玉琢磨 工藤吾六



鹿太郎の没後、日本一美しいと称賛される「白水ため池」も建設されている。

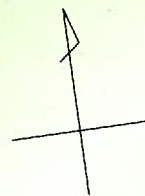
鹿太郎は農民救済のため、井路を作り、田畑に水を引き、新田を開発しようと、単独で水源地を探し求めた。

井路開削には多額の資金を必要とすることから、普通水利組合の設立に奔走した。

年号	元号	鹿太郎 年齢	出来事
一八五八年	安政5年	21歳	軸丸部落蒸れ米事件
一八六七年	慶応3年	30歳	後藤鹿太郎 水源を求め測量開始
一八六八年	明治元年	31歳	明治維新となる。
一八九〇年	明治23年	53歳	小富士村長甲斐健次郎 小宛井路開削計画着手
一八九八年	明治31年	61歳	(第1回)普通水利組合設立申請
一九〇一年	明治34年	64歳	明治井路水利組合設置願却下(明治井路は前の名称)
一九〇八年	明治41年	71歳	(第3回)普通水利組合設立申請
一九〇九年	明治42年	72歳	富士緒井路普通水利組合設立認可
一九一一年	明治44年	74歳	富士緒井路開削起工式10月10日
一九一二年	明治45年	75歳	芝浦製作所と発電所建設の契約成立
一九一四年	大正3年	77歳	富士緒井路通水6月12日、発電所竣工
一九一六年	大正5年	79歳	後藤鹿太郎翁亡79歳、甲斐健次郎翁亡72歳
一九一九年	大正8年		草深野揚水所竣工
一九二〇年	大正9年		片ヶ瀬揚水所竣工
一九二二年	大正11年		富士緒井路耕地整理組合設立
一九二八年	昭和13年		白水ため池竣工
一九五一年	昭和26年		富士緒井路土地改良区に改組
一九六七年	昭和42年		幹線水路改修工事着工(泉管)
一九八四年	昭和59年		第2発電所竣工

富士緒井路管内平面図

幹線水路延長15km (うち隧道70カ所、延長10.5km)



山崎補水線頭首工



▲ 久住山

国道442号線

国道57号線

竹田市

玉来川

豊肥線

玉来駅

中尾峠

中尾水路橋

四俣水路橋

門田

至熊本

竹田市 荻町

竹田市

豊後荻駅

馬背野

至熊本

山崎取入口 $Q=0.917m^3/S$

山崎川

柏原

鳴田

山崎補水線

大野川取入口 $Q=2.1215m^3/S$

流域96.4km²

大谷川

瀬口川

神原川

次倉

白水溜池

放水量 $Q=1.2045m^3/S$

宮砥

大谷ダム(熊本県高森町)



大野川頭首工

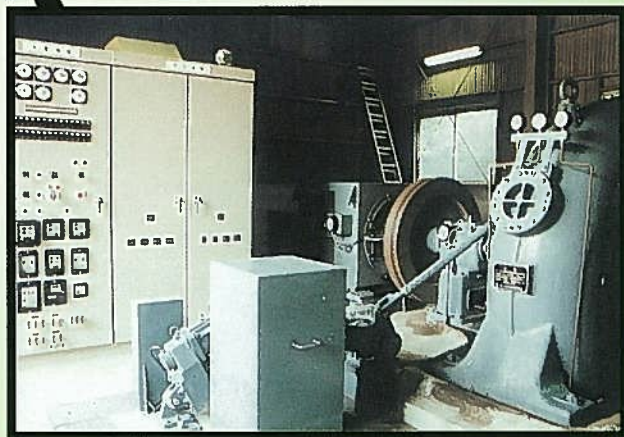


白水ため池

竹田市



第2発電所

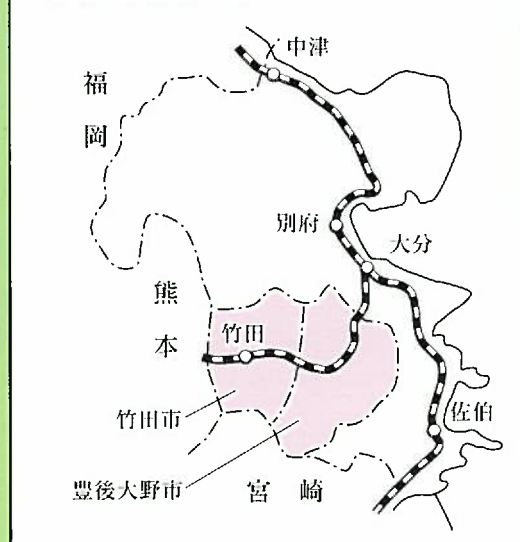


第1発電所内部

凡 例

	溜池
	頭首工
	幹線水路
	支線水路
	河川
	国道
	県道他
	発電所
	市町境
	受益地
	水路橋

大分県位置図



豊後大野市
→ 緒方町

富士緒井路ものがたり

一. 蒸れ米事件

江戸時代以前から、豊後大野市緒方町の軸丸地区は古くから水利に乏しく、天水や少量の湧水を利用して、山間のわずかな田地を耕作していた。

安政5年(1858)、軸丸村が納めた年貢米が藩の蔵で蒸れた米になり、これを良い米と取り替えるよう藩から厳命が下った。高率の上納米を納めた後で、手持ち米は乏しく、このため、借金したり、土地を手放すなど苦心惨胆、その場をしのぐのに容易でなかった。万延元年(1860)、軸丸村54人の農民が藩に対し、150貫目の銀札の拝借を願い出た。



藩は農民に対して、「徒党を組んで強訴した」という当時の御法度にふれるとして、主謀者は厳しい取り調べの末、2名は他村に追放された。

後藤鹿太郎は当時23歳、この事件によって、「灌漑用水を求めなければ」という強い思いを抱いた。

二. 後藤鹿太郎の決意

慶応3年(1867)6月は一月の間、雨が無く大干害に見まわれ、村人たちは困窮のどん底に落とされる惨事となった。

鹿太郎は用水路を掘り、新規に水田が造成できれば、人々を苦しみから救済できると考え、憤然と決意を固め自身で工夫した方法で実地を測量・踏査した。(当時30歳)

数年の後、大谷川からの延長15キロメートルの引水に確信を持った。

井路の実現のために鹿太郎は家政を省みず、私財を投じて人を雇い、測量、交渉、世論の喚起とあらゆる方策を探り続けた。

井路の開削には何よりもまず多額の資金が必要になるとともに、村々や村人の利害関係の調整等に困難を極めた。

結局、軸丸村1か村のみでは手に余る大事業であったため、明治28年(1895)に事業中止となってしまった。

村人のためにも必ず用水路を造るぞ。



後藤鹿太郎

三. 鹿太郎、甲斐健次郎と意気投合、井路開削を推進

小富士村でも、小宛を中心として寺原、辻に井路を開削しようという計画が村長甲斐健次郎(県議、村長)の手で進められていた。

甲斐は以前から、井路の開削は水利組合を立ち上げて、実行することを考えていたが、多額の資金が必要になることから、村民の賛同を得ることがなかなか出来なかった。

明治29年(1896)、鹿太郎と甲斐が出会い、同じ願いを抱いていることを知り、井路の実現に向けて、ともに邁進し始めた。

明治31年4月に、「水利組合設置申請書」を県知事に提出したが、書類の不備等が有り、却下された。

四. 普通水利組合設立も前途多難

その後も甲斐健次郎、児玉琢磨(6代目9代目小富士村長)、工藤吾六(10代目小富士村長)らは水利組合の設立に奔走した。

これまで開削事業を「明治井路開削事業」と称していたが、この頃から事業名は小富士村の富士、緒方の緒から名前をとって、「富士緒井路開削事業」となった。

明治42年3月、ついに「富士緒井路普通水利組合」設立が認可された。

初代組合長を児玉琢磨として体制が固まった。

井路開削許可が下りたのは明治43年1月29日であった。



カイ ケンジロウ
甲斐 健次郎



コダマ タクマ
児玉 琢磨



クドウ ゴロク
工藤 吾六

五. 発電所建設

片ヶ瀬と草深野は広大な土地だが高台にあるため開田が進んでいなかった。

水を汲み上げる良い方法がないか、児玉琢磨や工藤吾六らが視察・研究を重ね、電気による揚水機が利用できる可能性を見出した。

そして、発電所1カ所、揚水所2カ所(片ヶ瀬、草深野)の設置に乗り出した。

しかし、当時は事例が乏しく、工事も思うように進まず、明治45年1月に芝浦製作所との間で契約してから、2年半の歳月をかけて大正3年7月に発電所が完成した。



現在の第1発電所



当時の発電所内部



当時の草深野揚水場

六. 井路の完成

大正3年(1914)6月8日を通水予定としていたが、6月3日に暴風雨のため各所が破損し、延期を余儀なくされた。しかし、昼夜兼行で復旧を行い、12日に見事に通水を見た。

しかし、それも束の間、19日に再び大雨に見舞われ、中尾峠の箱樋が数十メートルに渡って崩壊した。7月17日に有志で通水祝いをすることにしたが、その日に草深野の隧道が崩落した。26日には小高野35号隧道が崩落し、入田の田地1haあまりを洗い流してしまった。

また、第1次世界大戦の物価上昇によって、負担金は21円(米およそ3俵強)に上昇し、膨らんだ負担金は組合員に重くのしかかった。土地を手放して、負担金を逃れようとする者や負担金が払えない者も出てきた。

このような中、鹿太郎は大正5年(1916)3月26日、井路開削の行く末を案しながら、79歳の生涯を閉じた。また、元来は資産家であった児玉も資財をなげうって、資金の調達に当たったため財産をすり減らし、晩年は困窮のうちに没した。



四俣水路橋



中尾水路橋

その後の富士緒井路の取り組みと発展

一. 富士緒井路耕地整理組合設立

水利組合の窮状を打開するため、大正11年9月に県に耕地整理組合設立の申請が工藤吾六らによって提出された。

認可されて国や県の支援を受けることになったが、組合員は長期に渡る負担を負うことになった。

二. 白水ため池の建設

大正13年7月は富士緒井路の水量が定量の5分の1以下に低下した。

原因は隣接する他の水利組合が上流に2カ所の堰を造ったためであった。

様々な増水工事を計画する中の一つとして、「白水ため池築造工事」が実施されることとなった。

三. 第2発電所建設

昭和50年代に入り、賦課金が1反当たり1万8千円という高額になり、運営の困難を来す事態になった。このような中、昭和53年に第1発電所の改修を行い、出力を200KWから380KWに増加させ無人化による合理化を実施した。

さらに、農業用水の高度利用による農業振興を図るため、昭和55年に第2発電所を計画し、59年に竣工した。第2発電所は最大出力1,500KWの電力を生み出し、賦課金の軽減と健全財政の確立に寄与している。

はくすい
白水ため池 (白水ダムとも呼ばれる)

白水ため池(昭和9年起工)は渇水時の用水不足を解消するために建設された。

形式	重力式割石コンクリートダム		
堰長(堤体の幅)	87.26m	堰高(堤体の高さ)	14.1m
貯水量	60万トン	貯水面積	10ha
竣工	昭和13年9月29日		
所在地	竹田市大字次倉字万田迫		
文化財	国の重要文化財に指定 平成11年5月13日		
事業費	210,000円		



^{えんてい}堰堤越流面に施した美しい幾何学模様の石張りのため流れる落ちる水は水泡を含んで、名称のとおり白水となって流れ落ちる。

また、堰堤の両袖は地盤が悪く水漏れ防止のため流速を弱め、堤体を保護するために右岸を湾曲面形状に、左岸には下流面に沿ってひな壇状に石を張ることで独特の流水美を生み出している。

これらが高く評価を受け、技術的・造形的価値から、国の重要文化財に指定を受けた。

日本一「美しいダム」と呼ばれる。



築造初期段階



右岸側(築造当時)



左岸側(築造当時)

写真提供:河野敦子氏

富士緒井路の通水80周年、第2発電所建設10周年にあたり、

後藤鹿太郎の功績を讃え、報恩の銅像が建立されました。

後藤鹿太郎翁の銅像は富士緒井路土地改良区事務所前に毅然と立っています。



後藤鹿太郎翁銅像
平成6年建立



銅像建立の碑文

富士緒井路創設者、後藤鹿太郎翁は天保八年九月十二日緒方町大字軸丸字柏野に生まれる。当地区は従来水利に恵まれず耕地の三割に満たぬ水田は谷間に散在し天水と少量の湧水に依存していたが、度々干害を受け農業所得は極めて低く貧困な生活を重ね特に慶応三年の大干害で住民は決定的な打撃を受けた。こうした困窮と悲惨な状況をつぶさに体験した翁はかんがい用水を求めなければという思いを胸中深く炎と燃やし農村救済の悲願を立て眼下を流れる大野川の上流に水源を定め水路を開削してこの地域を開田とする遠大なる構想を抱いた。その後、水源や路線、水量の確保と成功を確信し下流沿線の既設水路との交流又世論の喚起に私財を投じ寝食を忘れ千辛万苦を重ねること二十年幸いにして当時の小富士村長、甲斐健次郎、後の村長、児玉琢磨、工藤吾六の三氏の同意と力強い協力を得て水利組合設立に東奔西走、數百回の協議や陳情嘆願を重ね遂に明治四十二年三月二十四日認可され改良区の前進である水利組合は誕生し明治四十四年十月十日起工、大正三年六月十二日竣工通水した。翁が水を求めて井路開削を発願して五十年、大悲願の水は苦難と辛苦の中、先達の尊い血涙と不屈の情熱で完成された。

本年、通水八十年及び第二発電所建設十周年にあたり祝賀記念事業として報恩の銅像を建立して四百余名の組合員と共に心から感謝の誠を捧げ後世に顕彰する。

平成六年十月二十五日

富士緒井路土地改良区 理事長 足立 貞良

参考文献：大分県土地改良史、富士緒井路水利史、白水ダム物語

協力：富士緒井路土地改良区

印刷：立川印刷株式会社

作成：大分県農村整備計画課